

元佐伯郡役所建築について

〈取り壊し前の実測調査から〉

廿日市の文化 第19集 所収

平成3年10月20日 発行

廿日市市郷土文化研究会



元佐伯郡役所建築について

〈取り壊し前の実測調査から〉

藤 下 憲 明

◆はじめに

廿日市中央公民館が昭和四十七年二月に竣工してから早くも二十年になろうとしている。

この地に洋風の佐伯郡役所の建物があったことを知る市民が何割いるだろうか。ここには明治時代の西洋建物を模した佐伯郡役所が建てられていたが、多くの識者に惜しまれながら解体された。

佐伯郡役所を偲ぶものとして中央公民館ホールの佐伯郡役所の表札と模型、建物の一部分、棟札などが残されている。

この稿は昭和四十六年に解体される前に何度か通って実測したものを作図し、各部分についての考察をしていたもので、今回の掲載に際して一部加筆したものである。

尚、架構についての記述は解体時に調査していないので省略し、各部分の詳細図、詳細写真の一部を割愛する。

資料として添付している佐伯郡役所仕様帳写の見積書については、何度か書き改められているので最終見積りとみられるものを掲載する。資料解説に際して難解部分については高本等、桑原貞紀両氏に御教示を頂いた。



在りし日の元郡役所全景

◆佐伯郡役所の設置

明治五年四月広島県下を一七の大区に区分し、その中を更にいくつかの小区に細分し、行政区と戸籍区が統一された。

佐伯郡は第四大区で事務所は廿日市に置かれ区長一名、書記数名を置いて郡を治めた。その事務所を区用所といていたが、明治六年九月に区用所を改めて区会議所と称した。

戸籍づくりが目的で強引に進めた大区、小区制は住民の強い反発と不信を受け、明治十一年十一月一日郡区編制法が施行され、大小区の制度を改め再び郡村の名称に復すると共に、郡に郡長一名、書記数名、町村に戸長が置かれた。

この事務所を郡役所といい、廿日市町に設置され庶務、勸業、租税、観学、出納の五掛で地方行政の中間機関として発足した。

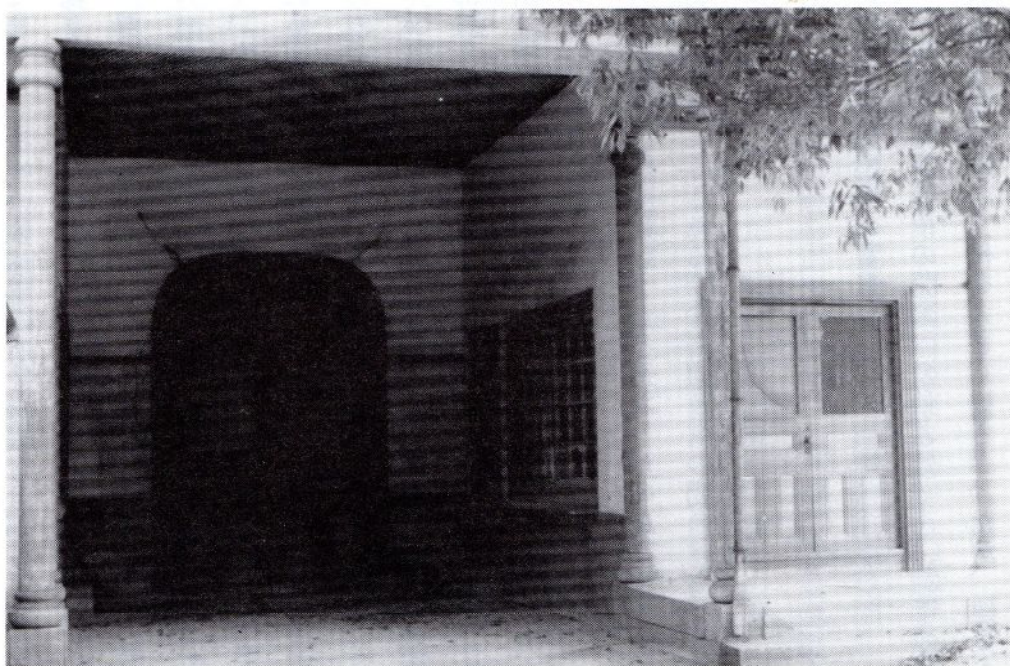
明治三十二年に郡制が敷かれ、郡長、郡書記、郡視学、技手などを置いて郡内を三二の選挙区に分けて、郡会議員三四名の定員で自治公共団体とし活動したが、あまり複雑な機構のために大正十二年三月三十一日に郡制は廃止された。

しかし、この郡長、郡役所はしばらく存続し、大正十五年六月二十八日に佐伯郡役所の廃庁式が行なわれた。

◆郡役所庁舎及び議事堂の建築

明治十一年十一月一日郡区編制法が施行の後、廿日市町に郡役所が設置されて庁舎が設けられたものと思われる。

明治十八年頃に新しく佐伯郡役所が建築されることが決まったと思われる。明治十九年八月には議事堂の工事に着手しており、明治二十年一月頃に議事堂は竣工している。



事務所棟 車寄部分

郡役所庁舎の工事は棟札によると明治二十年六月二十八日に着手している。七月二十一日付の芸備日々新聞の記事によると、既に落成していた連合会議事堂に仮の役所を置いて事務を執っていたようである。



佐伯郡役所表札



事務所棟札

郡役所庁舎の建築は在来の役所の建物を解体し、古材を使用して洋風の郡役所庁舎梁行九間半、桁行一五間で坪数一四二坪五合（約四七二平方メートル）、二階建の洋風応接所梁行二間、桁行二間半で延坪数一〇坪（約三三平方メートル）、応接所への伝廊下などが、工費五四八円四一銭八厘で建築された。

建設委員は佐伯郡書記谷口瀧三郎、同末岡正及び佐伯郡共有物世話係松本介三が担当し、棟梁は黒川村（大竹市）の忠末小兵衛

であった。後掲の佐伯郡役所仕様帳写は郡役所庁舎、応接所、伝廊下の仕様書と見積り書で棟梁の忠末小兵衛が記したものである。郡役所庁舎は同年十二月二十二日に竣工し、同日午前十時に移庁式が行なわれた。その後、大正十一年に臨時席として使用されていた二階建の建物、宿直所の平家建物が取り壊されている。これら何れも洋館建物とあるので郡役所庁舎、議事堂に見られるような手法で建てられていたものとみられる。

大正十五年郡制が廃止され廃庁式以降も庁舎と議事堂は存続し、郡農会などの諸団体に貸与され廿日市土木出張所、佐伯地方事務所、福祉事務所などに使用されたが、廿日市町中央公民館の建築のため昭和四十六年六月二十三日に解体された。

二階建の応接所はいづごろ迄あったのか不明であるが、佐伯郡制誌の写真にみられる庁舎と議事堂の間の建物がこれではなからうか。

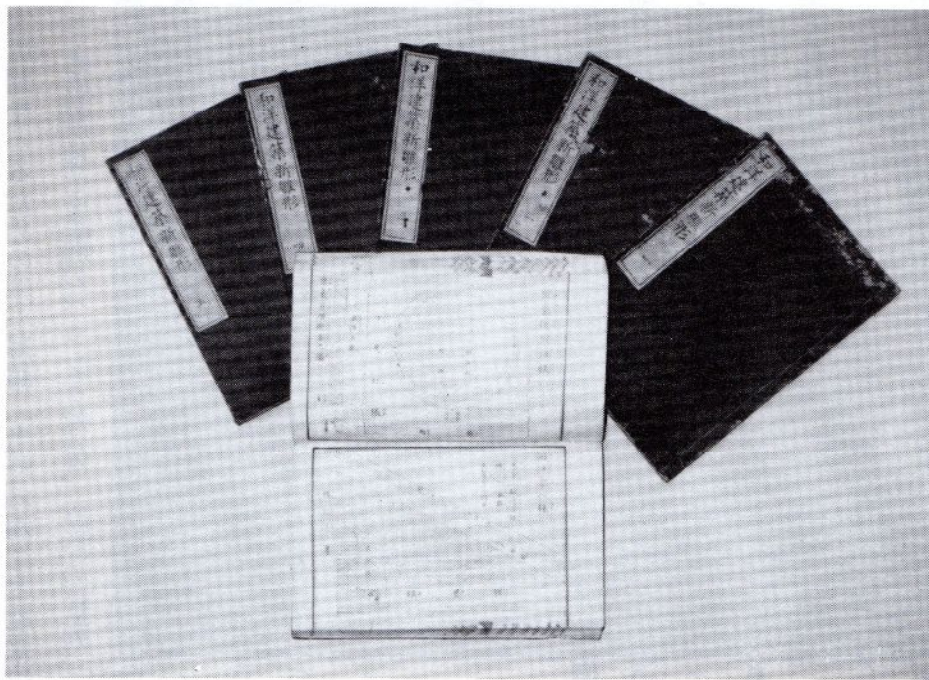
◆擬洋風建築出現の背景

幕末から維新前夜の開国への動きは、三〇〇年の間純粋培養されてきた我が国の文化を大きく揺さぶったが、建築も例外でなく長崎、横浜、神戸などの欧米人居留地には日本人が見たこともない洋風建築が建ち並んだ。

維新を成し遂げ、欧米列強に劣らぬようにと意気込んだ要人たちは建築の西洋化、洋風建築の建設に心血を注いだ。この時期の

洋風建築は早く言えば欧米の模倣で、様式を折目正しく守り荘厳さを競いあった。

佐伯郡役所が出来てからの資料であるが、明治二十二年十二月二十二日付の芸備日々新聞に「帝国大学にては近年追々建築学の進歩と共に、世上一般造家法建築法等に注意するに至り、随て家



和洋建築新雛形書

屋等も年々洋風に赴くもの多きを以て、此際欧米各国古今建築上の図案及び雛形等を蒐集志て、大に建築学上の参考模範に共せんとて、欧米各国及び留学専門家へ夫々右蒐集方を照会せる由」とあり、外国の建物などを参考にして建築の西洋化の雛形書などが作られていた。

こうした政府サイドとは別に木造建築の伝統を受け継いできた棟梁達は、居留地や東京に建った洋風建築を見聞し、木造建築の技術で洋風の外観を実現させた。これが擬洋風建築で見聞がもとだけに様式に則った洋風建築は出来ず、意匠のある部分は本来のプロポーションを失い極大化されたり、あちらこちらに和風の意匠が顔をのぞかせた。

◆佐伯郡役所擬洋風化への工夫

建物をいかに洋風らしくするか建設担当者及び棟梁にとって最大の課題であり、長崎、横浜、神戸等の欧米人居留地、東京、大阪等大都市の洋風建物を見聞したり、又、西洋建築雛形、和洋建築新雛形等の雛形書を参考にして構想を練ったものであろう。

工事を担当した棟梁の忠末小兵衛は、佐伯区河内の元広島綿糸紡績会社小深川工場、厳島の大鳥居、そのほか各地の寺院、神社、埋立て、道路築造等の土木、建築にわたり幅広く関わっており、従来の木造建築の技術で木造の西洋館を模して建てる事は出来ない事ではなかったであろう。

大広間をとるための洋小屋組（当時は西洋木屋梁組といっていた）、事務所棟で正面のベランダ部分、円形の柱列、柱頭柱脚の線型、軒下蛇腹、菱目組天井、事務所棟、議事堂棟の外廻りで軒裏の曲線仕上げ、円形換気孔、出入口のファン・ライト式欄間、建具廻りの線型の額縁などは従来の日本建築には見られない手法であり、これらの詳しい手法については次の項で述べる。

◆ 建築手法の詳細

《事務所棟》

〈外廻り〉

屋根は古来の入母屋造りで、破風及びけらば（妻側の三角形の部分）は土蔵造りなどに見られるように漆喰で塗り込まれており、小屋裏の換気孔はモダンな円形に作ってある。

軒蛇腹といわれる軒裏は凹型の曲線で塗り込んであり、壁は大壁で腰は下見板張りとしてある。

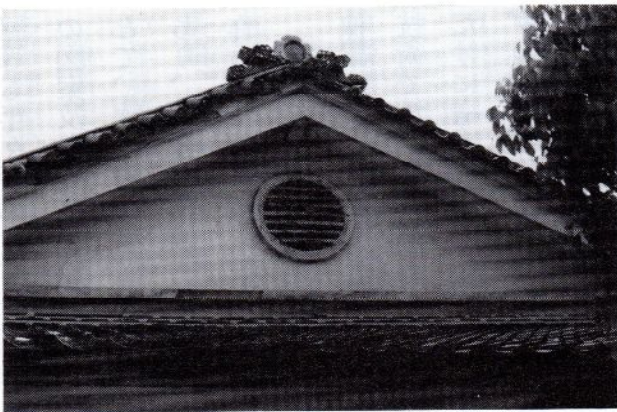
入母屋風の洋館として三田市の旧九鬼隆範邸が知られるが、古来の入母屋造りで洋風らしく見せるために円形の換気孔や曲線の軒裏などと相当苦勞をしたものであろう。

〈ベランダ〉

建物の正面にあるこの種のベランダは当時数多く見られ、異人館の普遍化したスタイルである。この様式をコロネード式（列柱廊）といい、建物の外面に円形の柱列を設けている。

柱脚には石造の線型礎石、柱頭には木造の線型を取付け、そのうえに軒下蛇腹が設けてある。軒下蛇腹は横長の長方形で凹凸の模様を漆喰で仕上げたものであり、擬洋風建築の特長の一つである。

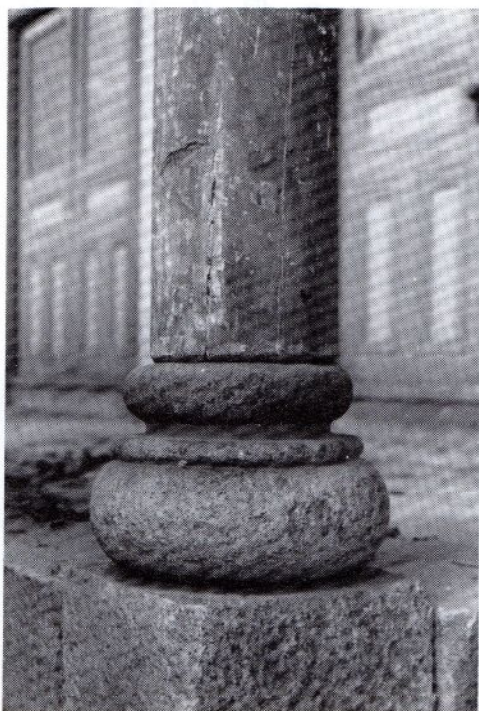
ベランダを設けたコロネード式、柱の線型、軒蛇腹等がある例として西宮市の旧辰馬喜十郎邸、松江市の興雲閣等に見られる。ベランダ、車寄の天井は網代風菱目組天井で、神戸市の旧キャサリン・アンダーセン邸、大津市の旧伊庭貞剛邸などと同じ手法である。



事務所棟小屋裏換気孔（上）と議事堂棟小屋裏換気孔（下）



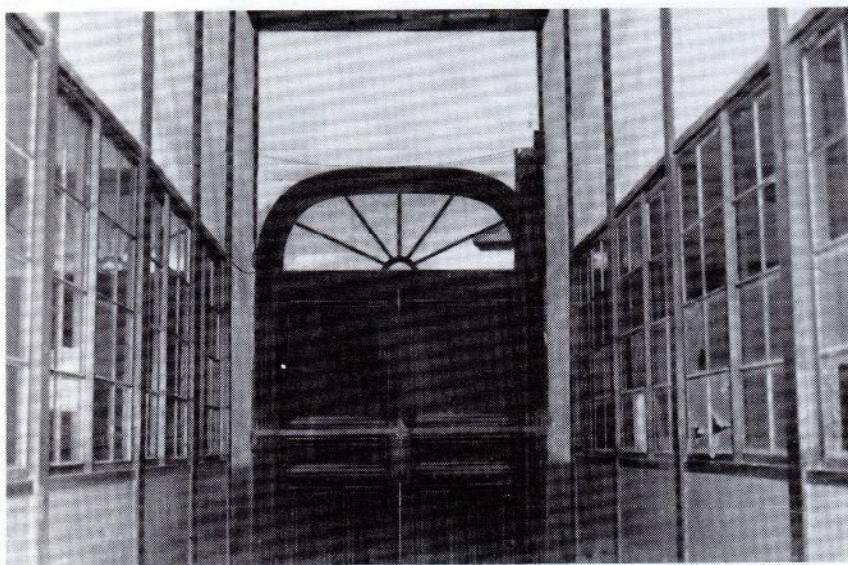
事務所棟 ベランダ上部



ベランダ柱列の柱頭繰型（右）及び
柱脚繰型礎石（左）

〈出入口、窓〉

車寄からの主出入口は両開き戸で、上部にファン・ライトといわれる扇型の欄間を設けているが、議事堂棟の欄間とは少し違った型である。この欄間の様式はイギリスのチューダー式建築によく用いられた四中心のチューダー風アーチ曲線に近い型でありこの様式の変形したもののである。



事務所棟ホールより玄関扉を見る

主出入口の外側と内側の周囲には、幅広で線型のある額縁を廻しており、外廻りの戸の施錠方法としてカンヌキが取り付けてある。

窓は縦長でガラス障子を両開きとし、外側だけに線型のある額縁を廻している。そのほか外廻りの両開戸、片開戸、受付窓には外側のみ額縁が廻しており、内部の片開戸には片側だけに額縁が廻してある。

《議事堂棟》

〈外廻り〉

屋根は事務所棟と同じ入母屋造りで、破風及びけらばは漆喰で塗り込んである。北側の換気孔は漆喰で二重の輪を造り、南側は木型で輪を造っている。

軒蛇腹は上下に二分されて凸凹型の曲線を組み合わせしており、漆喰で塗り込んである。

〈ポーチ〉

事務所棟の正面とは異なり起り屋根で斗拱（斗組、組物、升形ともいう）をもった古来の社寺建築の様式をもったものであり、当時の洋風建物にはこの種の起り屋根をもったポーチは盛んに用いられている。

熊本市の旧熊本洋学校外人教師館のポーチが起り屋根であるが、柱が円形で斗拱はなく洋風に近いポーチである。このように洋風に見せる努力をするのであるが、議事堂棟のポーチは次に述べる

ような古来の様式で造ってある。

妻側に起り破風が取り付けられてあり、頂点部分に花模様の懸魚がある。柱は四角型で唐戸面が付けてあり、柱脚に杢石、柱頭に斗拱が取り付けである。斗拱は和様で斗椋と肘木で構成されている。

柱から柱には虹梁が架けてあり虹梁には眉、袖切及び絵様の装飾彫刻が刻されている。虹梁が柱をつき抜けて出たように見せた装飾彫刻を木鼻といい、明治時代に造られた東本願寺大門の木鼻と型が類似している。

〈出入口、窓〉

ポーチからの出入口は両開き戸で、上部にファン・ライト（扇型欄間）を設け、外側と内側の周囲には幅広で繰型のある額縁を廻している。

窓は事務所棟と同じ手法であり、そのほかの両開戸、片開戸には両側に繰型のある額縁が廻してある。

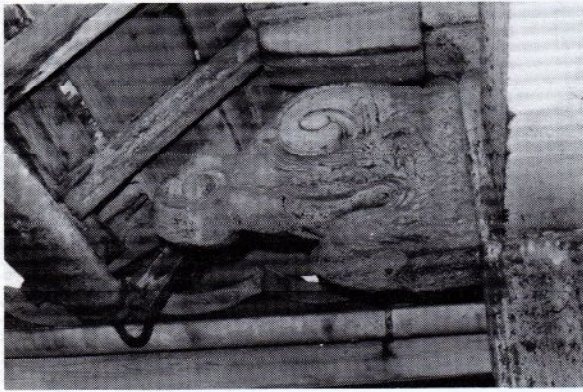
〈内部廻り〉

天井は折上げ天井で中央付近に四角形、円形を組み合わせた装飾がされており、ここに照明のランプが釣り下げてあったものと思われる。

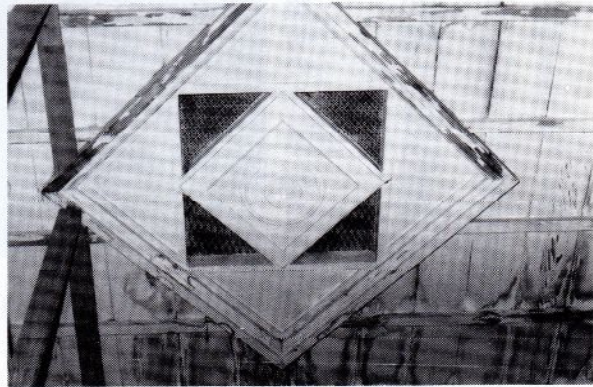
議場の両側には傍聴用の造り付けの腰掛けが設けられている。



議事堂棟北側屋根及びポーチ屋根部分



議事堂棟ボーチ屋根の木鼻



議事堂棟議場天井ランプ釣座

◆佐伯郡役所建築ニ付大工方仕様書写

一、在来役所其他共不用之建物解体シ此古物之内宜敷

品今般建築ニ差置候ニ付諸品損シ不相成様注意

解体シ夫々品分テ積置候コト

但シ材木板類共相渡し候ニ付品ニ寄り挽割相用候儀モ可有之

コト

一、役所九間半梁ニ桁行拾五間西洋作り平家建之築ニ付土台

栗五寸角継手割継角枘入柱松長三間五寸角側廻り

窓之割合ヲ以テ建堅メ壁貫^{四寸}五通り入筋違^{三寸}壱^{五寸}式分

柱間每上下式挺ヅツ入窓受古物柱へ枘入込セン留メ

土居枕ヶ所ニ寄り古物相用其余松長三間物^{六寸}七寸

陸梁持モ右同断都合鉄輪継陸梁松長四間半四間ヲ

取交シ^{八寸}土居枕へ掛渡シ陸梁毎ニ鼻腕木作り以ス

棟桁六寸角出シ桁^{四寸}五寸陸梁鼻へ枘入ニシテ指堅メ

合掌^{六寸}八寸陸梁へ枘入六分鉄棒式本ヅツ座付ニシテ

入堅メ上へ繫張物^{巾式寸}厚式分^{三寸}鉾打式寸歩ニテ打棟樑

六寸^{六寸}尺式寸サクリ出し同下陸梁へ枘打抜込セン留メ繫鉄物

長四尺^{巾壱寸式分}厚式歩^{六寸}鉾穴式寸歩之三寸鉾所打小樑傍樑共へ繫

鉄物右ニ準じ棟桁蟻掛母屋桁^{五寸}都合割継合掌江

合カキ桁特木キガリ式本ヅゝ上ヨリ打込入母屋破風甲落破風

板杉^中厚^式寸指桁古物三尺歩之破風板へ納入品板^三五寸

前包板^中厚^式寸雨覆^三五寸いつ連も漆喰塗塗下地鋸目

入イラカ木摺受古物相用古板巾^式寸^二挽割り

荒葺差正式寸釘ヲ打風窓図面ノ通り振分出来旁

好ミ通り密式寸角イスカ継送六本正五寸釘打広木舞

四寸正三寸釘打裏古六歩板相用不足松五分板新物

入正式寸五分正式寸釘取交打ノコト

一、帶木板共在来古物継手割継入堅メ根た古物

送り六本正五寸釘打床板松長式間^巾厚^式寸板白削正三寸

釘打沓^五式寸柱へ彫入窓入^三式寸^五分柱サクリ除ク

四方納入ハメ合入口入^式寸^五分柱サクリ除ク

取仕付四方大トメ納入ニシテは免合入口^式寸^五分内外へ

仕付敷居鴨居^式寸溝突柱へ納入ニ堅メ天井廻り縁

四寸天井受式寸角継手イスカニシテ上ニ尺五寸歩之釣木

式寸五分カキ合^式寸間歩之正四寸釘打不陸無之様入念

釣り合張り骨杉四分板巾式寸ニ挽割白削式寸明キニシテ

正^式寸五分釘打廻り縁紙留り打天井受木上ハへ^野天^カ井

古板ヲ以相重子打透キ目無之様打調ノコト

一、見付正面入口木柄樫入^五寸額縁^式寸^五分上へ

窓図面ノ通りニ候得共尚相好ミ候儀も有之側廻り

壁木摺仕立同断廊下丸柱差渡し七寸上下キタミ付上長

柄口クロクリ箱仕立等差入其外強梁中合箱板轉^カ之

通り同所辺天井廻り縁^三四寸受木古物右同断杉四分

板巾^式寸ニ挽割白削ヘン塗りニシテ^式寸明き細

天井ニ出来野天井古板打之コト

一、蛇腹覆^三四寸柱へカキ入正六寸釘打木摺受

長四尺^中厚^式寸古物ノ内挽割クリ取付木摺覆ヨリ

摺每共正三寸釘打木摺杉四分巾^式寸^二挽割

荒葺卷式分明キニ^式寸五分釘打ノコト

一、応接所式間梁桁式間半西洋作二階建^式寸棟

土覆柱其他共前書之振者二階尾引^六寸ツナキ帶木

五寸六寸二階板板松長式間^巾厚^式寸白削両サ子

ハギ正三寸釘打階子巾三尺^式寸所木柄松^八寸^二分

板ヲ以出来総体手摺樫口クロクリ好之通り

出来同断伝ヒ廊下右準シ手摺共仕付之事

一、西洋小屋盤鉄具鉄棟セン鉸折釘其他諸鉄物

受負方ヨリ差出し木皮切レ木等持帰ルコト不相成

好之所へ積置候コト

一、家根土居葺杉粉ヲ以テ壺寸六分足薄柿葺其

上割竹ヲ以テ壺尺歩之押縁打調ノコト

当役所建築ニ付屋根瓦葺調仕様目録

一、屋根瓦在来解取古瓦ノ内九一袖瓦宜敷分南平ヨリ

西平へ廻し葺調余ハ新上等九一袖瓦軒先キ唐

草付東西南北共土居左官葺調之コト

但し解取之赤土在来ノ処十分之サン三相渡ス

一、甲落之所長袖都合鬼板瓦カンプリ瓦共新調ノコト

一、棟熨斗カンプリトモ松板熨斗下タ熨斗隅熨斗

トモ同五枚熨斗鬼板付ノコト

一、応接所家根外井之通り棟熨斗五枚重ノコト

一、壁小舞解取之古竹相用其余新竹ヲ以テ

カキ調荒付裏返し大直シ小直シ中塗両面白土上塗

三度塗之コト

一、蛇腹木摺ヨリ大直シ小直シ中塗共見返し入念不陸

座ル様出来白土上塗右同断之コト

一、棟カンプリ共丸熨斗鬼板ヒレ付下熨斗隅熨

斗丸瓦トモ五枚鬼板総体漆喰并ニ踏下ケ軒

先キトモ袖瓦五枚通り漆喰塗ノコト

一、両破風木摺塗風窓其他共塗調入母屋甲落

ミノ甲総体漆喰塗ノコト

一、見付正面木摺壁塗調并前側土廊下強梁

上図面之振合ハ候得共尚好ミ通り漆喰塗ノコト

一、応接所壁屋根漆喰其他等外井之通り

明治廿年五月

佐伯郡役所

廿年五月十七日出ス

御役所差ス控

記

郡役所建築

梁行九間半 桁行拾五間

壺棟

応接所二階付

梁行式間 桁行式間半

壺棟

伝廊下

壺棟

右御仕様帳通り大工木挽左官瓦葺師人夫金物

釘類タシ土カキ灰油子フノリ竹縄ソキアミ網金ヘンキ

荒ヲスサハラ等相調積書

金 貳百五拾壺円五拾貳錢四厘 大工作料

同 貳拾四円七拾五錢 人夫賃

同 五拾壺円三拾壺錢五厘 金物釘代

同 貳拾六円五拾三錢貳厘 ソキ代

同 六円貳錢八厘

応接所伝廊下 金物ソキ代共

同 貳拾五円八拾五錢

瓦葺師手伝夫共

同 六拾六円拾三銭四厘	左官手伝夫共
同 四円八拾壹銭貳厘	タシ土代
同 拾三円拾銭	カキ灰代
同 拾六円三拾六銭八厘	油子代
同 五円八拾九銭五厘	フノリ代
同 拾六円五拾銭	旧役所解払夫賃
同 貳拾三円七拾六銭	金網代
同 三円三拾銭	ヘンキ代
同 五円五拾銭	竹タシ
同 六円五銭	道掛縄小まへ縄共
同 壹円	荒ヲ スサハラ代

合計金五百四拾八円四拾壹銭八厘

荒ヲ スサハラ等相調積書左之通り

右之通り積り書付奉差上候

以上

明治貳拾年

亥五月

忠末小兵衛

佐伯郡役所

御中

◆付録 本稿には直接関係しないが、かつての議事堂内の様子の片鱗を伺わす「佐伯郡会々議規則」「傍聴人取締規則」の抜粋を参考のため掲げる。

「佐伯郡会々議規則」

第九章 議場ノ秩序

第三八条 議席ニ列スルトキハ洋服又ハ羽織袴ヲ着用スヘシ

第三八条 議席ニ列スルトキハ帽子外套ヲ着スヘカラス、又傘杖ノ類ヲ携帯スルヲ許サス

「傍聴人取締規則」

第三條 凡ソ傍聴席ニアル者ハ左ノ事項ヲ遵守スヘシ

一、帽子又ハ外套ノ類ヲ着スヘカラス

二、傘杖ヲ携帯スヘカラス

三、飲食喫煙又ハ談話スヘカラス

四、議員ノ言論ニ対シ可否ヲ表スヘカラス

五、喧擾ニ渡リ議事ヲ妨害スヘカラス

◆佐伯郡役所建築についての文献

・元佐伯郡役所について

近藤 豊

〈廿日市の文化第九集—廿日市町郷土文化研究会〉

・元佐伯郡役所建築について

天満 祥弥

〈支部報鯉城No.3—広島県建築士会広島地区支部〉

・広島県の明治建築

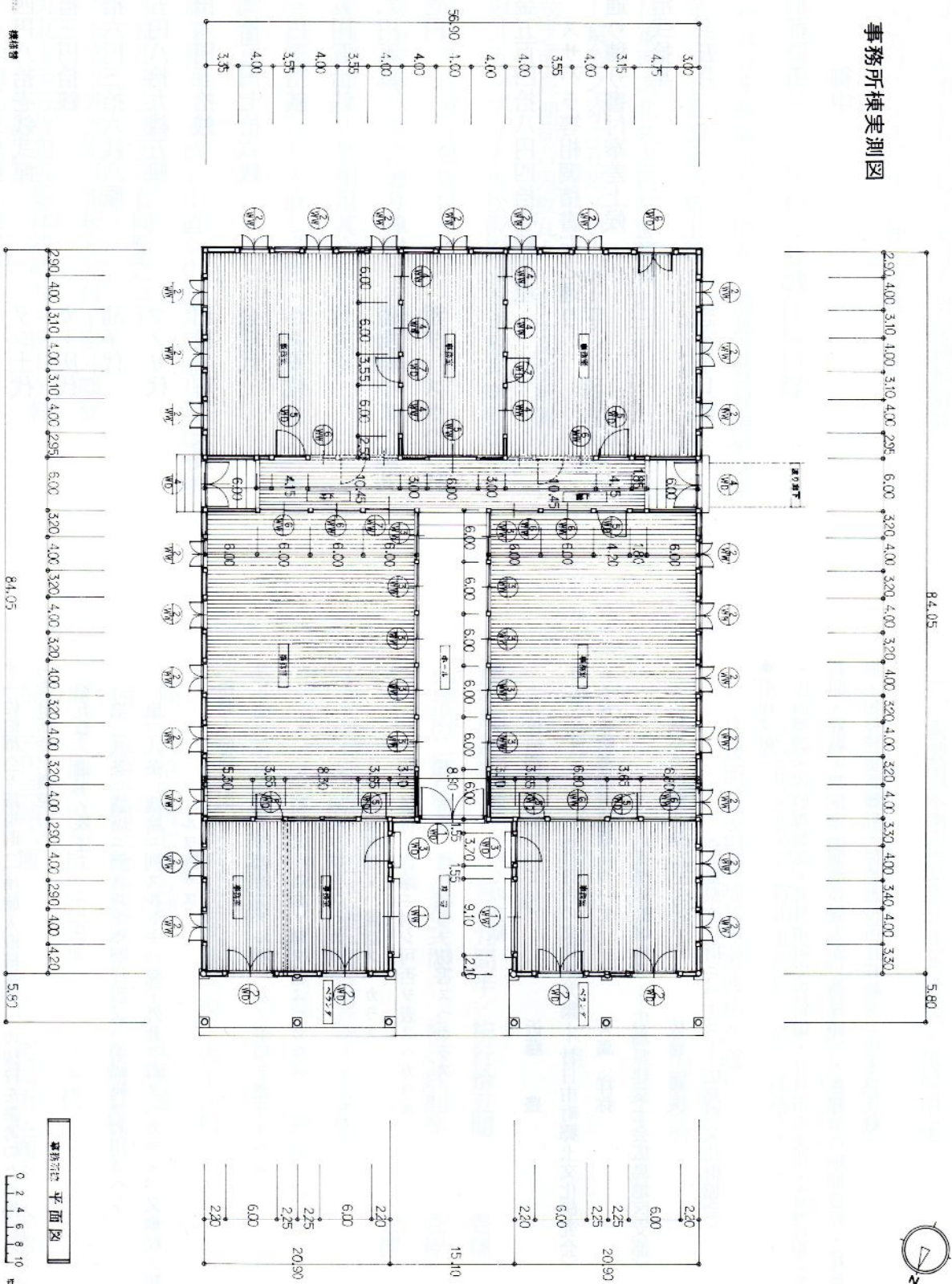
佐藤 重夫

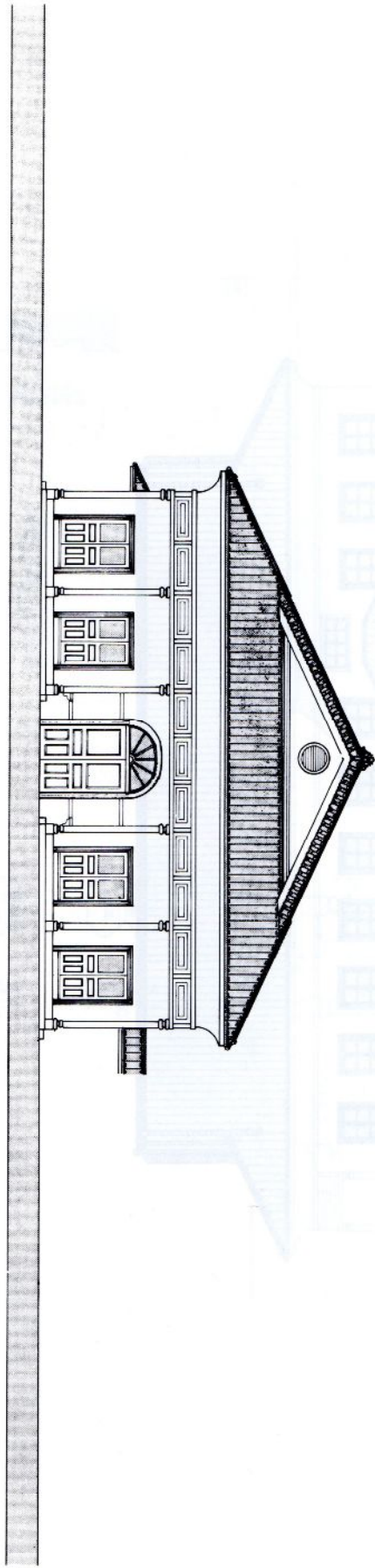
〈広島県文化財ニュース—広島県文化財協会〉

◆引用文献

・佐伯郡誌・佐伯郡制誌・廿日市町史資料編・廿日市の文化・芸備日報・芸備日々新聞・鯉城・新住宅（明治の異人館、西洋館）・古建築の細部意匠・建築用語辞典・和様建築新雛形・佐伯郡役所仕様帳写（忠末慧氏蔵）

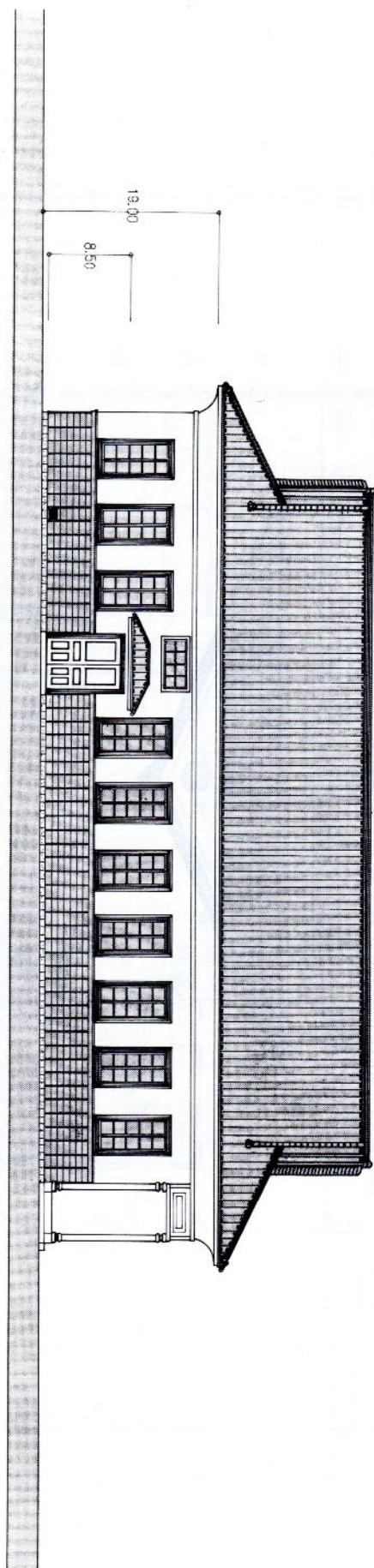
事務所棟実測図





NORTH ELEVATION

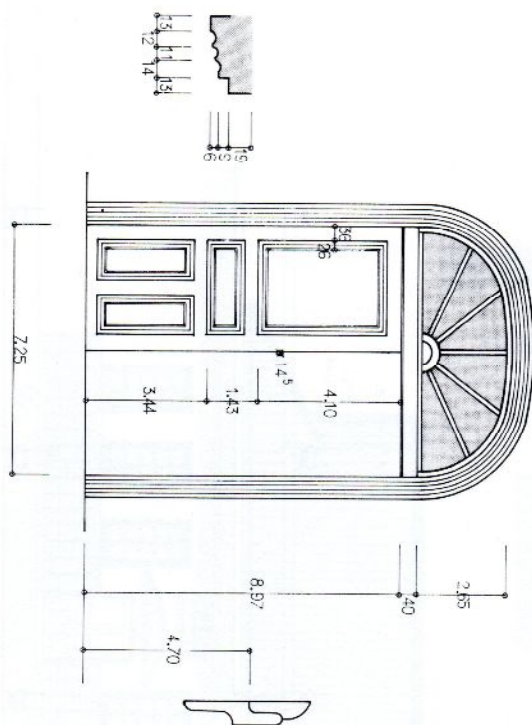




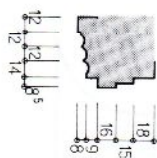
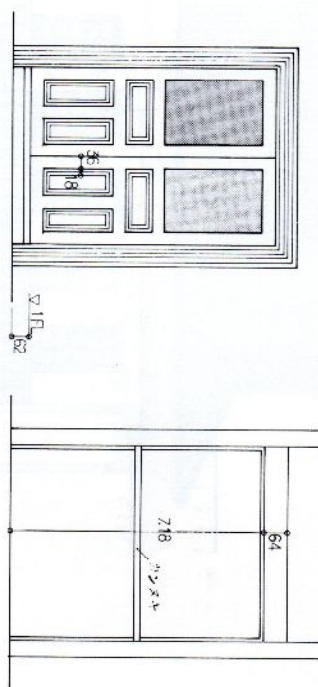
EAST ELEVATION

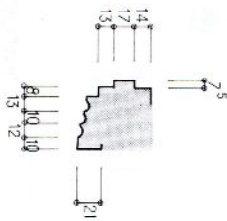
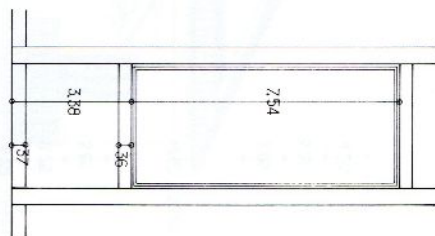
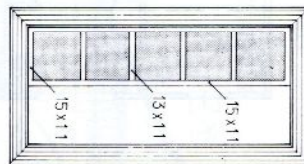
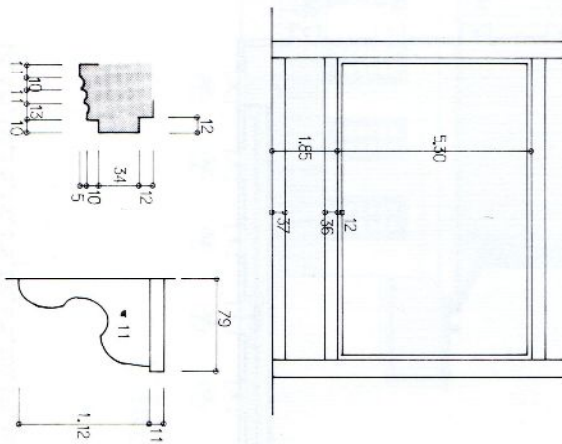
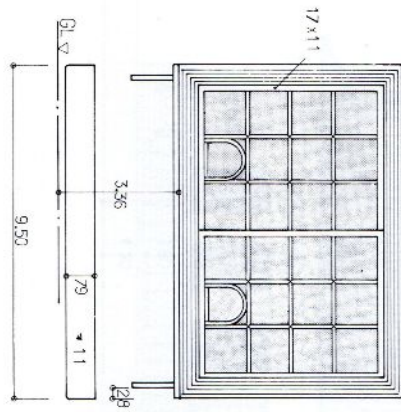
0 2 4 6 8 10
M

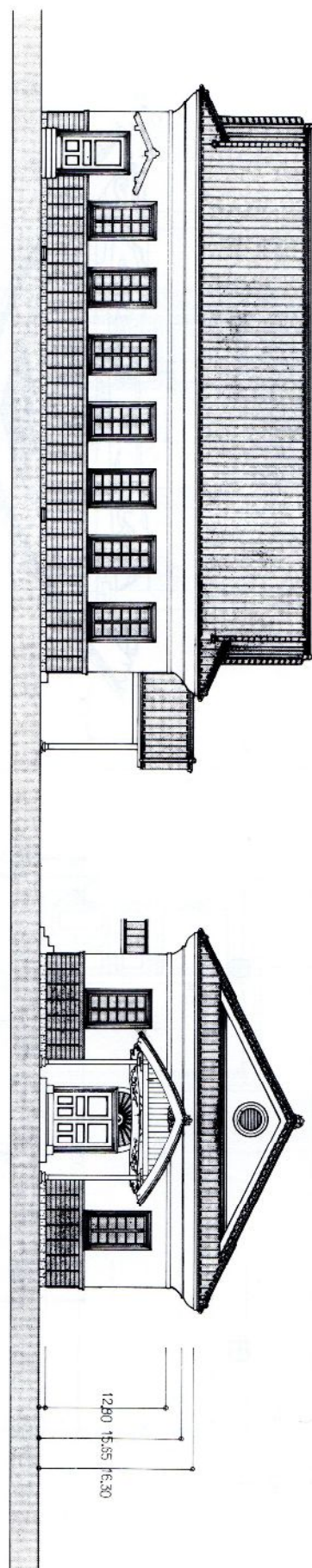
10



11







东立面图

0 2 4 6 8 10
米

北立面图

12.80 15.55 16.30

